



学校だより5月号

令和4年 4月28日

横浜市立新田小学校

自尊感情と自己有用感

校長 村岡 靖

4月のある朝、子どもたちの登校が終わり、昇降口に立っていた私に、1年生の女の子が、私の袖をぎゅっと引っ張りました。どうしたのと顔を見ると、しくしく泣いています。「他の人の靴があるの。」泣きながら、私を自分の靴箱の前に引っ張っていったのです。自分の靴を入れるべきところに、他の友だちの靴が、何故か入っていました。担任の先生に伝えてうまく解決してもらいました。

1年生の女の子には「えらかったね。」と声をかけました。「困っているときに助けてと言えることは、とても大切な事なんだよ。」

SOSを出すことは、生きていくうえで大切なスキルの一つです。自分一人で問題を抱えず、他の人に助けてもらいながら、問題の解決を図ることは社会人でも必要なスキルです。それができるとできないとでは、大きく違います。自分は一人ではない、困っているときは人から助けてもらえる大切な存在なのだ、と実感できるからです。

赤ちゃんは、お腹がすいたり、おしっこをしておむつが濡れたりすると泣きます。これがSOSです。するとその都度、大人がお乳を飲ませてくれたりおむつを替えてくれたりします。不快な状況を、泣いてSOSを出すことで、周りの大人が快の状態にしてくれるのです。それを何千回も繰り返すことで、親に対して愛着を形成していきます。そして、自分は大切にされている大切な存在なのだ、心に刻んでいくのです。愛着がうまく形成されなかった子どもは、自分を大切にすることができず、わざと危険なことを平気でします。自分を大切にできない人は、当然他人も大切にできません。新田小学校の子どもたちに「あなたたちをとても大切に思っていますよ。SOSがでたら全力で支えますよ。」というメッセージを常に発信できる学校でありたいと思っています。

自尊感情やそれに裏打ちされた自己有用感という感情はとても大切です。少し前に、生徒指導上に課題のある中学校が京都にありました。「どうせ俺なんか。」という言葉が日常的に聞かれたそうです。先生方はその中学生たちに、幼稚園児や保育園児の世話をする活動をさせたそうです。最初はそのような活動自体を危ぶんでいた先生もいましたが、数年たつと学校が変わってきたそうです。小さい子どもたちから感謝され愛された中学生は、自己有用感が高まり、学校は落ち着いていったそうです。自分は人の役に立っている、自分は大切な存在なのだ、という実感がもてるような教育活動をこれからも目指してまいります。